



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.193
2019.10.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

心に残る 先学の人生記録 —読書日記から— 大村 裕

第12回

藤田中『面会謝絶だあ 孤高の考古学者・原田大六』

(西日本新聞社 2010年)

福岡県の沖ノ島祭祀遺跡や平原遺跡などを調査した孤高の在野考古学者・原田大六(1917~1985年)の伝記である。巻末に考古学者の森浩一や万葉学者の東茂美の寄稿文及び妻のイトノからの聞き書きを添えている。原田の伝記としてはボリュームがなすぎ、やや物足りない。しかし要所は掴んでおり、一般向の書籍としてはこれでのいだろう。

私が初めて手にした考古学・古代史関係の書籍は原田大六著『磐井の叛乱』である。今から50年前、高校の図書室の中であった。高校の図書室にも配架されているくらいなので、原田の著作は結構売れていたようだ。何しろ印税で『平原弥生古墳』の報告書刊行費用(数千万円という)の半額を賄えたというのだから。反権力・反権威の意識が強かった当時の学生の間でもファンが多く、何人もの学生たちが「大六詣で」を試みていたという。

原田は福岡県糸島郡原町において1917年に出生。1934年に旧制糸島中学校を卒業した後、東京の津上製作所に就職。金属研磨工(ラッピング工)となる。この経験が銅鏡の「湯冷え論」(「伝世鏡」批判)に繋がっていると本人は述懐している(「邪馬台国論争」)。

1938年には徴兵にあい、一時除隊したものの終戦時まで中国大陆において兵役に服する。驚いたことに、憲兵の経験もあったという。それが原因で、戦後せつかく手に入れた代用教員の職を追われている。しかし、下級兵に対して制裁を加えたことがなかった、という部下の証言がある。彼自身、中国兵の捕虜や村人たちの命を大分助けたと部下に語っている。あえて憲兵になったのは、非戦闘員なので前線に立つことが少なく、生き残れる可能性が高いということにあったらしい。敗戦後捕虜となるが、満足な食料が与えられず、カエル・ネズミ・ヘビなどを食って飢えをしのいだという(以上、菊池誠一「考古学者 原田大六論(一)」『学苑』762号 2004年による)。写真を見ただけで彼の強烈な迫力が伝わってくるのは、この軍隊および戦犯収容所での苛酷な体験が根底にあるのではないか。なお復員後は九州大学名誉教授の中山平次郎から個人教授を長期にわたって受けている。

狷介で気性の激しい原田の言動に辟易とした研究者も多かったであろう。「新田五郎」という謎の人物(恐らく偽名)は、『考古学研究』(22巻2号 1975年)誌上においてかなり手厳しい批判文を寄せている。本書でも原田への厳しい人物評が散見される。しかし、自分の金と自分の力で研究者としての地位を築いてきたその学問に対する情熱は称賛に値する。「平原弥生古墳」を福岡県教委と共同発掘した後、その出土資料の収蔵施設を自ら建て、大鏡の修復費用として「私の印税1000万円を寄付する」から「国宝修理師を雇って復元せよ」と福岡県教委に迫っている。そしてこの遺跡の報告書をほとんど自力で作った情熱には、率直に敬意を表するものである。長野県の宮坂英弼・藤森栄一と並び

称される偉大な在野研究者といえよう。彼の実測図は文句なく美しく、その描線はのびやかで、生き生きとしている。ロットリングやデジタル機器によるトレースでは表せない美しさである。それらの図のトレースは、何と毛筆で行なったというのである。並々ならぬ技量に、賛嘆する研究者は多いのではないと思われる。しかし解釈が飛躍し過ぎ、折角の地道で基礎的な努力の成果が損なわれている場合もあることが惜まれる。例えば原田は、「平原弥生古墳」の被葬者を神話に登場する「玉依姫」と断言している(『實在した神話』)が、墓から被葬者の名前が書かれた遺物が出土しなければ確定的なことは言えまい。学説の暴走に「待った」をかける親しい仲間を持たなかったことは、原田にとって不幸なことであった。

原田の勉強法はユニークである。「まず学界の中核の人物を攻撃対象に設定し、「その人物の著作を徹底的に読破」する。「相手を打倒粉碎するため、脇目もふらず勉強し、論文や著作で血祭りにあげる」というのである。なるほど。当てもなく勉強するより、このやり方は集中力が倍増して効率がよいかも知れない。「大六が一心に本を読み、勉強している姿は、ほれぼれして、思わずすりよりたくなるぐらいでした」と妻のイトノがのろけるほど熱情的なものであった。しかしこのような、仮想敵を設定して徹底的に批判しまくる姿勢は、多くの敵をつくらずにはいられない。

発掘現場では、未熟な学生や若い研究者を罵倒し、その仕事に介入することが多かったらしい。「報告書の作成でも、ほかの人の担当分にこれでもかとイチャモンをつけ、割り込み、押しのけて書いた」という。紳士然とした容姿の岡崎敬(九州大学)による原田批判と敵対行動(森浩一の証言参照)には驚きの念を禁じ得ないが、両者の間に余程のことがあったのであろう。沖ノ島祭祀遺跡第三次調査での「原田外し」は、原田側(森浩一)から見れば「官学」のいやらしさばかりが目につくが、逆の立場から原田を見れば、目にあまる「不条理」な行動がこのような結果をもたらしたのではないかと勘繰ることも出来る。

私としては気難しい原田よりも、その妻のイトノに強く心が引きつけられるものである。小学校の教員をしながら定職を持たない夫を生涯支え、夫がやり残した仕事を自分の退職金と貯金をつぎ込んで完成させたその情熱には脱帽である。この本の文末に掲げられたイトノの談話は胸を打つ。

「私の命とお金の続く限りは、主人の書き残した未発表の原稿を本にして出版したいと思っております。それが私の一番の生きがいです」

妻をここまで心酔させた原田の凄まじい考古学への情熱と実践に、私は心からの拍手を送りたいと思う。この本は稀代の在野考古学者の評伝としては、内容的にもボリュームの面でもやや物足りない部分があるが、原田の最大の理解者・妻イトノの心情を引き出し、その人柄を後世に伝えた点で、私の心に強く残るものとなっているのである。

*巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第12回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第186回) 原田悠希 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第9回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「日本のタイル工業史」 深井明比古 …4

お詫びと訂正…192号目次の「マイ・フェイバレット・サイト」で小野様のお名前に記載ミスがありました。正しくはP3本文の準弥様です。小野様及び読者皆様に訂正しお詫びいたします。

考古学の履歴書

カナダで米寿をむかえました(第9回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

9. 学位論文のための資料収集旅行

1960年にトロントに移る前に、ハーヴァード大学人類学の博士課程の単位を修得していたのだが、その後、子育てやエジプト行きで、学位論文をまとめるにはいたっていなかった。エジプトから戻った翌年の1964年からはトロント大学の非常勤教員として学部の授業を担当する一方、学会で研究発表したり、論文集に投稿したりなどで忙しくなり、学位論文からますます手はなれることになった。といて、非常勤から専任のルートに移るには博士号が必要なので、1965年の夏休みは学位論文に本腰で取り組むことにした。ハーヴァードでの主任指導教授のモヴィウス先生とも相談した結果、アメリカにいたときやり始めていた新大陸関係の仕事をご破算にして、日本の旧石器文化をテーマとしてやり直すことにした。1949年の岩宿遺跡発掘以来、日本の旧石器文化に関する資料は急速に増加しているが、先々号で触れた通り国外ではまだよく知られていない。年々増えてゆく日本列島の先石器文化と縄文文化への推移に関する資料を広義の人類学の一部としての考古学という北米人類学の枠組みにおいて解釈し、英文でまとめてみるということは私の貢献できる仕事かとおもわれた。

それには、日本の各地をまわって出土した遺物やその出土状態を見学・検討し、研究者の方々のご意見を聴かなければならない。そのための研究旅費をカナダ政府の研究助成機関に申請したが、私はすでに博士課程を修了しているの、院生を対象とする奨学金のカテゴリーには入らず、といて博士号をもっていないから、ポストドックの研究員でもないといった中途半端な地位なので、研究旅費がもらえるかどうかあまり期待していなかったところ、出るということになったので、1965年の夏休みに6週間の資料収集旅行を実現できることになった。ちょうどそのころ、夫フィリップがイランで新しいプロジェクトを開始する計画で、7月15日から2ヶ月イランに予備調査のため出かけることになっていた。はじめの計画ではフィリップの留守中に私が5歳の子供を連れて日本へ行くというプランだったのだが、それよりも、フィリップの出かける前に私ひとり研究旅行をしたほうが、仕事もはかどるだろうし、子供にも楽だろうということで、6月1日から7月半ばまでフィリップと日通いのお手伝いさんにダグラスをあずけて、単身日本にむかった。

大体の旅程は、北海道1週間、本州北部1週間、関東地方2週間、中部地方1週間、中国、四国、九州1週間の目安で、どこで、誰に会って、何をみればよいかなどについて芹沢長介氏からご教示いただいた。北海道での大きな収穫はウィスコンシンからもどられた吉崎昌一氏を函館博物館に何度かおたずねして、白滝、樽岸、札滑、立川などの資料をみせていただき、詳しい説明をうかがえたこと。北大では大場利夫、児玉作左衛門両先生はお留守だったが、北大医学部に保管されている資料を児玉名誉教授の令息の児玉譲次助手のお世話で観察させていただいた。

東北地方で、ゆっくりと時間をとったのはもちろん東北大学所在地の仙台。芹沢氏のご配慮で多くの資料を見せていただき、写真や抜刷を多数頂戴した。そして私が都立大学院生だった頃東大から集中講義に来てくださった石田英一郎先生が東大退官後所属されている日本文化研究所の施設を見学したり、芹沢氏との共著論文を英訳させていただいた中川久夫氏に初めてお目にかかって地質関係のお話をきくなど盛りだくさんの日程だった。

東京では岩宿遺跡発掘に始まる日本列島の旧石器文化研究の中核地となっていた明治大学をおたずねして、1963年にお世話になった杉原、大塚、戸沢諸先生に再びおめにかかり、数多くの重要な資料について勉強させていただいた。そのほか、江坂輝弥先生のところにある四国の上黒岩洞穴の資料をぜひ見てゆくようにと芹沢氏から何度も言われていたので、慶応大学には2度もお邪魔してゆっくり見せていただき、国学院大学では小林達雄氏から伊勢見山などの資料などについてのご意見を伺った。東大では理学部の人類学教室で鈴木尚先生をおたずねして更新世出土の人骨についてお話をうかがったほか、文学部の考古学研究室で当時の若手の考古学者、加藤晋平、藤本強、大井晴男の諸氏と会談する機会があった。ちょうどウィスコンシン大学のチャード博士指導で論文をかいていたリチャード・モーランから質問を列記した手紙がきていたので彼の提起した問題点を中心に峠下型ピュアリン、白滝型コア・ピュアリン、湧別技法、舟底型石器などの定義について論議がはずんだ。

関東平野から内陸にはいって、群馬大学の新井房夫先生、信州大学の小林国夫先生から地質関係のお話をきき、諏訪では藤森栄一氏から信州地方の旧石器・縄文文化について藤森氏独特の観点からのご意見を興味深くうかがったのち、日本海側まで足をのばして、新潟大学医学部に小片保先生をおたずねした。新潟まで出向いた主な目的は大分県聖嶽洞穴で黒曜石製の細石核と同じ層位から出土したと報告されていた頭骨片と下肢骨の破片に関するご意見をきくこと。これらの人骨片は現在の専門家たちによればおそらく縄文またはそれ以降のものだろうとされているが、当時は旧石器時代の文化遺物を伴った数少ない例で、頭骨片の形態は周口店山頂洞の101号化石に一番似ているとされていた貴重な資料だった。聖嶽洞穴の発掘調査にかかわられた小片教授からいわゆる“聖嶽人”のことばかりでなく、明石、葛生、牛川、三ヶ日、浜北など、当時知られていた化石人骨についても忌憚のないご意見を聞かせていただいた。

最後の1週間は本州西部から四国、九州にかけての南西方面、こちらは列島の東北部に比べて遺跡数はまだすくなかったが、瀬戸内海地方の資料は倉敷の鎌木義昌氏のところに大体そろっており、九州に関しては別府大学に新しい資料が集まっていると芹沢氏からきいていたので、1951年に設立した倉敷考古館をおたずねしたら、当時学芸員をしていた間壁忠彦・間壁葎子両氏ご夫妻が大変ご親切に関係資料を説明してくださった。その後九州まで足を延ばして別府大学の賀川光夫先生にお世話になった。賀川先生には2001年にお亡くなりになるまでこのあと何度かお目にかかっている。1965年の資料採集旅行は日本の先生方のお陰で、多量の収穫をトロントに持ち帰ることができた。

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在：神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現：奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学卒業
1953-54年	東京都立大学【現：首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人文学部人類学 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学 専任教員;2009年以来名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。今回は間壁忠彦先生・間壁葎子先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 186

津倉古墳 ～岡山県岡山市～

原田 悠希

私が紹介するのは岡山県岡山市北区京山に所在する津倉古墳です。この古墳は、後の私にいい意味でも悪い意味でも衝撃を与えてくれた古墳です。津倉古墳は旭川西岸の京山山塊ひとつ(標高約56m)に位置する古墳時代前期の前方後方墳です。近くには池田動物園があり、現地からもライオンたちの雄叫びがよく聞こえます。津倉古墳周辺の平野部には縄文時代後期から遺跡が形成され、津島遺跡では弥生時代前期から水田が営まれるなど築造前から活発な人間活動が窺えます。弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて北方約2kmの半田山丘陵上には都月坂2号弥生墳丘墓、七つ坑1号墳をはじめとする七つ坑古墳群、都月坂1号墳が築かれます。また旭川東岸にも備前車塚古墳をはじめとする著名な古墳がいくつか確認されています。しかし、津倉古墳は吉備の前期古墳の一番地的な地点に所在しているものの実態が不明瞭なままです。

さて、ここで少し私についてのお話をしたいと思います。私が考古学に足を踏み入れたのは小学6年生の時です。宿題で古墳を調べ、興味を持ち始めたところに、勝負砂古墳の現地説明会が開かれると知り参加したのです。その時の衝撃と感動によって、いつか自分も石室を調査し、副葬品を見つけ取り上げたい(その頃は浅はかなので古墳を調査すれば副葬品が出てくると思ってた)と夢を抱いたのです。果たしてその夢は叶ったのでしょうか。

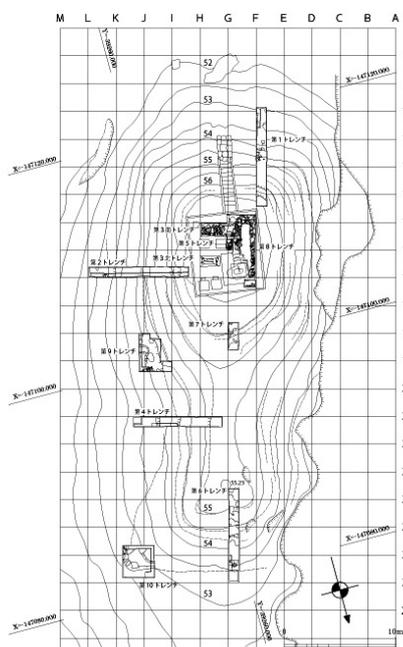
話は戻り、私が津倉古墳と出会ったのは学部1年生の冬です。たまたま入学年度に津倉古墳の測量調査が始まると聞き調査に参加しました。寒風吹きすさぶ中、測量をしたのを覚えています。その後、2014～2017年度にわたり4度の発掘調査が行われました(図1)。ここからは調査で判明した概要についてお話したいと思います。墳丘については、西側が崖に削られ、後方部墳頂に近代の墓地が造成されていること以外は比較的良好に残って

いました。墳長は38.5mの前方後方墳であり、前方部は二段築成でした。また、前方部と後方部頂の接続部分には舌状の盛土が認められました。前方部前端付近から古墳に伴う土器(壺形など)が出土したものの、特殊器台型埴輪・普通円筒埴輪は認められず、葺石もありませんでした。次に主体部ですが後方部頂に2基、墳丘主軸を挟んで並列して見つかりました(東主体・西主体)。墓壇の切りあいから東主体、西主体の順で築かれたことが分かっています。石室石材はいずれも古銅輝石安産岩を用いてますが、東主体は裏込めに大型の花崗岩角礫を使用しています。東主体は南小口(幅約1.2m)を検出したものの後世の改変によって全体像が不明のままです。東主体に伴う遺物も見つかっていません。西主体は北側が一部失われているものの石室床面の大半と副葬品は良好に依存していました(図2)。内法で残存長4.1m、幅約0.85m、残存高約0.8mです。壁面はほぼ垂直ですが、上部で持ち送り気味になります。床面は全体的に赤く彩色されており、粘土棺床の窪みは緩やかにカーブしています。鏡付近が最も鮮やかな赤色で、床面もわずかに高くなっていることから北枕と考えています。副葬品は棺外から壺形土器1点、棺内から銅鏡1点、鉄器数点が石室の中軸上で出土しています。津倉古墳の時期は墳丘と主体部から出土した土器より、古墳時代前期前半の終わりから前期中頃と考えています。

以上が、津倉古墳の概要ですが現在も本報告に向けて作業中であり変更する部分もあると思います。津倉古墳の報告書が皆様のお手元に届くよう一丸となって頑張りしたいと思います。私は調査全てに参加し、念願かなって主体部の調査を担当することができました。また、他大学からも調査に参加してくれるなど交友関係も広がりました。三次元レーザーや地中レーダー、SfMといった最新の機械や方法を見ることもできました。しかし、良い思い出ばかりではありません。東主体部での調査は掘

れども掘れども主体部が出ず困り果てていたのですが、実はトレンチが先述の後世の改変部分の中だったのです。また、西主体の副葬品はトレンチの責任者でありながら、自分が不在のタイミングで出土している状況でした。このニアミス感が私を悲しませたのです。やはり自分が最初に見つけれなかった。それでも、初めての古墳の調査や地元の方への説明会、テレビ・新聞の取材対応など今の仕事に直結するものを経験できたことも事実です。私は現在、岡山市で文化財専門職に就いています。津倉古墳を掘った本人がそれを管理・保護する市に就職したのは何かの縁だと思っています。今後も津倉古墳で得た経験を忘れずに邁進していきたいと思っています。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは四田寛人さんです。



▲図1 津倉古墳トレンチ配置図



▲図2 西主体石室と副葬品(南から)
(岡山大学考古学研究室提供)

考古学者の書棚

「日本のタイル工業史」

日本のタイル工業史編集委員会編／INAX出版(1991)

深井 明比古

私の書棚の一角にはタイル関係の図書が占めている。と言うのも、思いもよらぬ遺跡に遭遇したからである。

平成14(2002)年11月、勤務していた兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に一本の電話が入った。「淡路島の珉平焼の窯が道路工事でつぶされています！」現地に急行すると何やら新しそうな陶器片やタイルの焼き損じと共に窯道具が足の踏み場もなく散乱している。早速試掘調査を実施しところ、谷を埋め尽くす陶器片などが垂直堆積6メートルにも及び、幕末から近代の陶器片などが確認された。取り扱いを検討した結果、兵庫県の歴史を解明する上で特に重要な遺跡「珉平焼窯跡」であることが判った。兵庫県としては近代の窯跡の調査は初ということもあり、取扱基準にしたがい型作りや規格が統一的なものは選択的取り上げを実施することとし、本発掘調査を進めた。

珉平焼は江戸時代の寛政8(1796)年に地元の庄屋職の家系に生まれた賀集珉平が天保3(1832)年に京焼の陶工尾形周平に師事し、それ以降作陶したものである。その作風は京焼風のほか東アジア各地のやきものの写しを含み、徳島藩のお国焼として蜂須賀公に重宝された。本発掘の結果、窯本体は調査区から外れるものの、コウカシ窯と呼ばれる薪の乾燥窯や作業場が発見され、物原から大量の陶器や窯道具、タイルなど28リットル入り遺物収納箱に約1千箱が出土した。

タイルの報告に際して、珉平焼を引き継ぎ明治時代以来隣接地でタイルを生産している(株)ダントータイルに聞き取りすれば明らかになると踏んだが、当時の技術を知る人や文献は殆ど残っておらず予想が外れた。そこでタイルの歴史や製法についての資料を調べた結果『日本のタイル工業史』に出会い「タイル考古学」を実践することとなった。

『日本のタイル工業史』はINAXが編集・発行しているが社史としてではなく、タイル工業の通史や生産等の歴史技術資料を集めし詳説されている。窯業の歴史については古墳時代の磚や古代の磚仏・中近世の敷瓦や腰瓦・近世のなまこ壁・中世末以降の登窯の伝統技術や製法の流れについて解説されており、我が国のタイル生産に至るまでの胎動を証明するように残存例が一覧化されている。

タイル生産に先行して外国から洋式煉瓦技術や近代窯業技術が導入され、幕末期の耐火煉瓦製造技術を向上させた。耐火煉瓦で組まれた反射炉では武器製造され、普通煉瓦は洋式建造物等に使用されて我が国の近代化に寄与した。また幕末から明治にかけて輸入されたタイル使用例が網羅され、ヴィクトリアンタイルを手本として硬質陶器開発へと推進させたゴットフリード・ワグネルの業績や倒焰式石炭窯の種類と地質学からみた日本の窯業原料についても科学的に検証している。

硬質タイルの国産化や各種タイルの発展は近世から続く陶板の延長上で考えられるが、土製の型に陶器づくりの胎土を充填する敷瓦(湿式タイル)が先行した。一方ヨーロッパで開発された乾式製法は、機械圧縮してタイルを生産するもので、

明治41(1908)年に淡路島と愛知県の会社により開発された。兵庫県の淡路島で珉平焼を継いだ淡陶(株)能勢敬三と愛知県名古屋で陶器生産していた不二見焼の村瀬二郎磨は共に東京高等工業学校(現 東京工業大学)で最先端の窯業を学び、乾式タイル開発過程が克明に記されている。

大正期から昭和初期になると衛生観念の向上から水回りを中心に乾式タイルが使われるとともに、洋館の外壁には外装タイルが多用された。乾式タイル生産は金型成形によるため表面の文様と共に裏側には社印や接着面の剥落防止の凹凸文様が刻まれる。淡陶〈DK〉、不二見焼〈FM〉、佐治タイル〈HS〉、佐藤化粧煉瓦工場〈ST〉、月星建陶社〈MS〉、山田タイル〈KY〉、日本タイル工業〈トンプ〉などが刻まれ、表面には色鮮やかな草花などがあしらわれたマジョリカタイルを主要メーカーがこぞって生産した。本書ではすでに乾式タイルの裏型の文様が生産者ごとに異なることを認識し、「後学のために巻末にタイルメーカーマーク・商標を明記し」とある。これらはタイルの生産者確定や生産年代に有用なデータといえる。

タイルには内装タイルのほか、外装タイルのほか、池田泰山や小森忍が制作した美術タイルがあり、作風・業績・使用例・特許までも集成されている。特にタイルの文様については多数に及ぶ文様を網羅するのではなく方形タイルの文様構成その対称性を分析し、ヴィクトリアンタイルとの共通性を証明した。また戦前におけるタイル業者生産実績表は資料が少ない業界にあって貴重な資料といえる。

戦後タイル工業の発展は進駐軍の兵舎やその他建築用タイル需要が一役かっている。占領下での輸出証明である「OCCUPIED JAPAN」印は昭和22(1947)年から昭和27(1952)年の間に使用されたが、その経過とともに生産統計や生産工場一覧も参考になる。

圧巻は資料編である。明治19(1886)年から昭和60(1985)年までのタイル使用主要建築物一覧からはじまり、タイル関係特許・実用新案抜粋表、博覧会出品や受賞者一覧、タイル生産・出荷統計、そして前述のタイルメーカー商標・マーク集やタイル年表まで網羅されている。

『日本のタイル工業史』はタイル関係の文献の根幹をなすが『日本のタイル文化』淡陶(株)1976年刊も重要な位置を占める。これらの文献や(株)ダントータイルが所蔵している現存タイルの裏型文様の分類から生産年代がわかる「タイル考古学」が提唱できた。日本製タイルは我が国をはじめ東南アジアからアフリカにも流通したことを確認できたのも、本書が大きな役割を占めている。年代決定が必要な建築史や考古学に限らず関連分野に有用な書籍といえる。あなたの書棚にも収めては如何か。

アルカ通信 No.193

発行日	2019年10月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ
	〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
	TEL 0267-25-0299
	aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp